

詩篇 76 篇

0 指揮者のために。弦楽器によって。アサフの賛歌。歌

A 《神の住まいにおける救出》

- 1 神はユダにおいて知られ、御名はイスラエルにおいて大きい。
- 2 神の仮庵はシャレムにあり、その住まいはシオンにある。
- 3 その所で神は弓につがえる火矢、盾と剣、また戦いを打ち砕かれた。セラ
- 4 あなたは輝かしく、えじきの山々にまさって威厳があります。
- 5 剛胆な者らは略奪に会い、彼らは全く眠りこけました。
勇士たちはだれも、手の施しようがありませんでした。
- 6 ヤコブの神よ。あなたが、お叱りになると、騎手も馬も、深い眠りに陥りました。

B 《恐るべき神の審き》

- 7 あなたは、あなたは、恐ろしい方。あなたが怒られたら、だれが御前に立ちえましよう。
- 8 あなたの宣告が天から聞こえると、地は恐れて、沈黙を守りました。
- 9 神が、さばきのために、そして地上の貧しい者たちをみな、救うために、立ち上がられたそのときに。セラ
- 10 まことに、人の憤りまでもが、あなたをほめたたえ、あなたは、憤りの余りまでもを身に締められます。
- 11 あなたがたの神、【主】に、誓いを立て、それを果たせ。
主の回りにいる者はみな、恐るべき方に、贈り物をささげよ。
- 12 主は君主たちのいのちを絶たれる。地の王たちにとって、恐ろしい方。

音楽で言う「二部形式」とは、「同じ比重をもつ二つの対立的な部分（AとB）から成り立っている曲」のことをいいます。この大きな「A」は更に「a + a'」、大きな「B」は更に「b + a'」に分かれます。詩篇 76 篇の構造はこの形式とやや似ており、節数も均等に二つに分けることができます。更に、それぞれの部分がまた二つずつ内容的に分かれていることから（3 節、9 節末尾の「セラ」に注目）、音楽における「二部形式」との構造的な類似性を見出すことができるでしょう。

本篇は一般的に、エルサレムに攻め込んできた 18 万 5000 人のアッシリア軍を一夜にして滅ぼした神の御業が背景にあると言われてます¹。都を包囲しイスラエルの神を罵ったアッシリアの將軍セナケリブの言葉は、ヒゼキヤの祈りによって神の許へと届けられました（Ⅱ列王 19:14-19）。この日、イスラエルの民は指一本動かすことなく、ただ王の祈りによってこの戦いに勝利したのです。「翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな死体となっていた」（同 19:35）。一説によると、アッシリア軍の間で疫病が大流行したとも考えられています。

¹Ⅱ列王 19:35～、Ⅱ歴代 32:21、イザヤ 37 章

A. 神の住まいにおける救出

1～3節の中にはイスラエル領内の地名が次々と出てきます。確かにイスラエルはソロモン王の死後、南北に分裂し「南ユダ」「北イスラエル」と呼ばれるようになりました。しかし、ここで言う「ユダ」と「イスラエル」は同義であり、「神の民イスラエルの全体」を表しているでしょう。「シャレム」は「エルサレム」の旧称であり、「シオン」は厳密に言えばダビデが占領した丘の上にあった要塞を指しますが、やはり「エルサレム」を詩的に表す表現です。エルサレムはイスラエルの中心地でありますから、神は民の直中に住み給うことを様々な角度から強調しているのです。私たちキリスト者の共同体にとっては、「この教会の中心にキリストはおられる」「私の心の王座に聖霊は住み給う」と言い換えることができそうです。

愚かにも、敵対者は偉大なる神が臨在される地に土足で入り込もうとしたのです。その大いなる御名を嘲り、天に向かって唾を吐いた。自分たちがかつて滅ぼしてきた諸国の神々の一人に「ヤハウエなる神」を数えようとしたのです（Ⅱ列王 19:10-13）。それがどんなに的を外した言葉であったか、どれほどの冒瀆であったかを後になって思い知ることになりました。

4～6節の中には「眠り」というキーワードが繰り返し出てきます。これは「死」を意味しますが、アッシリア軍が城門の外でひっくり返っている様子を思い浮かべることができるでしょう。彼らは主なる神の臨在にそのまま近づこうとして聖なる光に打たれたのです。旧約聖書にはたびたびそのような描写が出てきます。神の箱を手で押さえようとしたウザは、その場で神の「聖」にふれて死にました（Ⅱサムエル 6:6-8）。モーセの時代、罪深いイスラエルの民は、聖なる山（シナイ山）に近づくことを止められました（出エジプト 19:21）。「主に近づく祭司たちもまた、その身をきよめなければならぬ。主が彼らに怒りを発しないために」（同 19:22）。神に近づこうとする者はよくよく自己吟味をしなくてはなりません。あの異邦の民（アッシリア）は、自らの罪を省みず、神を神とせず近づいたために滅ぼされたのです。実は、「眠り」とは表現は違いますが、12節ではもっと露骨に「いのちを絶たれる」と言い換えられています。私はここに「a'」の共通性を見出しています。

一点、「えじきの山」（4節）という言葉の意味はやや掴みにくいところです。原文で使われている「קָרַב／テレフ」という言葉は「餌食」「食べ物」「葉」といった意味を持ちます。文脈で捉えるならば、神の聖なる山は諸外国の高山よりも偉大であり、それらを飲み込んでしまうほどだという意味になりそうです。

B. 恐るべき神の審き

7～12節では「恐ろしい神」という表現が頻出します。この詩を歌っている詩人本人が、目の前で起きた神の御業を畏れているようです。「地は恐れて」（8節）の「地」には、敵対者のみならず、神の民までもが戦っている様子が窺えるでしょう。そもそも、神の民も元を正せば、誰もが偶像礼拝者であったところから贖われて神のものとされたのです。このことは、異教の神々を拜んでいたということばかりを指しているのではなく、自己を神として生きていた自らの半生（自己神論）を

思い起こして言っております。キリスト者は他の人々と比べて何か優れたところがあるかという、そうではありません。ただ、罪のうちから贖われた、恵みを受けた、それだけの存在なのです。

7～9節では特に「神の審き」が強調されており、7節などは「最後の審判」を思わせます。「地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。『私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう』」（黙示録6:15-17）。最後の審判では、すべての人が聖なる神の御前に立たされ、自分の人生の全体が想起されるでしょう。何を思い、何を語り、何を行なったか。神の御前には何一つ隠し立てはできません。罪人にはとても耐えられない日となります。しかし、キリスト者にはただ一つの希望があります。それは、キリストが私たちの弁護者となり、地上で犯したすべての罪は既にご自身の十字架の血潮によって処理済みであることを最高裁判官である父なる神様に証言してくださるのです。ゆえに、私たちは「赦された罪」として、涙ながらに自分の人生を振り返ることになるでしょう。「嗚呼…イエス様を信じていて本当によかった」と胸を打ちながら言うことになるでしょう。

10～12節では、神を神としなかった者が、神を認めざるをえないようになることが言い表されています。そして、人間が悪い動機で行なったことまでもが、ことごとく神の目的のために用いられていたことを知るのである。このことは、罪が罪とされないという意味ではありません。罪の事実は厳然として審きの下に置かれながらも、すべてのことを通して神が最善の御心に到達させてくださる信じがたい御業を見るということです。「人の憤りまでもが、あなたをほめたたえ」（10節）という不可解なフレーズは、このように「神の摂理」を言い表していると思われまます。

11節と12節でも、神は「恐るべき方」と繰り返されます。詩人はアッシリア軍を一瞬のうちに壊滅に追いやられた神の御手の恐ろしさを目の当たりにし、自らも震え、同時にイスラエルをお救いくださった恵みの大きさを誉め讃えているのです。最後の審判の日にも同じこと（相似的にもつと大いなること）が起きるでしょう。すべての人が神の審きの座に出で、その永遠の行き先が決定されていく様子を震えながら見、同時に救われた恵みの大きさに主の御名を讃えるのです。

最後にコーダとして。本篇は神への「恐れ」をもって締めくくられてしまった感がありますが、頌栄をもって終わりたいと思います。自らの罪を認め、我が身に起きた救いの恵みの大きさをコントラストに置いて、ますます主の御名を誉め讃えましょう。